

本多勝一

中国
の
旅



本多勝一

中国の旅

朝日新聞社

ほんだ・かついち

1931年、長野県に生まれる。現在、
新聞記者。著書に『愉しかりし山』
(仮面社)『山を考える』(実業之日本社)
『英語版(全訳)戦場の村』(未来社・近
刊)『事実とは何ふ』(未来社)など。

中国の旅

昭和47年3月25日／第1刷発行

昭和47年5月10日／第6刷発行

著者／本多勝一

発行者／朝日新聞社 角田秀雄

印刷所／凸版印刷株式会社

発行所／東京・名古屋
大阪・北九州 朝日新聞社

定価／720円

0036 - 253984 - 0042

——本書によせて——

いま戦争責任を追及する意義

森 恭三

本多勝一記者と私の最初の出会いは一九六七年の春、サイゴンにおいてであった。かれは藤木高嶺カメラマンとともに民族解放戦線地区入りを工作していた。私は北ベトナム入りの査証をすでもっていて、ハノイ入りをする前に「北」と「南」の相違を、たとえ短期間なりとも自分の目で見ておきたかった。そこではじめて顔を見合ったのである。

同じ新聞社で働いていても、持ち場がちがうと、おたがい案外に話しあう機会がないものだ。しかし、たがいに任務をおえて帰国した後は、ベトナム問題の講演会などで、いっしょになる機会ができた。そういうある日、二人だけで食事した機会に、私は先輩ぶって言ったものである——「君はルポルタージュに徹するのが賢明だと思うよ」と。「私もそのつもりです」とかれは答えた。

私自身、ルボを書くのが好きである。従軍記者をしていた時代はもちろん、欧米特派員時代には、ずいぶん書いた。ルボは「書評」と同じで、やつつけ仕事の的にまともなことも可能だが、掘り上げてゆけば、きりが無い。私の場合、ルボ書きは楽しみと苦しみとの交錯だった。なぜなら、私のように国際政治や経済を担当する記者としては、短期間に、できるだけたくさん資料に目をおさねばならず、そのことと、現場に立って自分の目で見て、できるだけ多くの人の話を聞くことは二律背反であり、それをできるだけ客観的に、かつ集約的に表現することは、けっして容易でないからだ。本多君のように、一つの問題を何カ月もかけて追究するような「ぜいたく」は許されなかった。その意味で私は本多君がうらやましい。

こんど本多君の中国ルボは、かつての日本軍がおかした残虐行為の数々を徹底的に究明するのが目的である。この発想は私自身にも、ずっと以前からあった。私は従軍記者の経験があるが、海軍報道班員としてラバウルを中心に、ブーゲンビル、テニアン、トラック、パラオ、ニューギニア、アンボン、セレベス、ジャワ、シンガポールなどを移動したのと、上海で「朝日」の記者として海外放送を傍受して本社に世界情勢を報告していたにすぎないから、私自身、

日本軍の残虐行為を一度も実見したことはない。だが、なぜ戦争がおこったのか、その責任はだれにあるのか、その戦争は実際どのようなようにおこなわれたか、等々の資料を集めておかねばならぬと考えた。でないと、日本が戦争のあやまちを、ふたたびくりかえすことになりかねない、と考えたからである。

「極東軍事裁判」がひらかれたとき、おびただしい分量の証拠品と証拠書類が準備され、提出された。私はできるかぎり多くこれを入力し整理しておくことが現代史を担当する新聞社の任務であると感じた。私は当時の社長、長谷部忠氏に直接提案し、即決した。二人の日本人弁護士と一人の米人弁護士が、実によく協力してくれた。私は資料に全部目をおし、ナンバーをうって整本し、目録をつくった。それは総計七百冊にもなる。ボールペンすらなく、コピイをとるのがむずかしい時代だったから、目録作成の方法自体、今からみるとずいぶん不満だが、当時としては最善をつくしたつもりである。

「極東軍事裁判」資料は、他に、法務省に一セットある。だが、いちはやく資料を整理し目録をつくったのは「朝日」だけだった。その後、われわれは、たがいに連絡をとって有無相通じ、やや完全なものが、日本では二カ所に保存されている。そのなかには、残虐行為に関するものも、ずいぶん多い。

しかし日本国民の多くは「極東軍事裁判」にもあまり関心を示さなかったし、戦争の原因や責任の究明に熱意がなかった。この点ドイツが、いまだにナチスのおかした罪の究明をつづけているのと、たいへんな相違である。わが国では「一億総懺悔」ということで戦争責任はうやむやにされ、運の悪い人たちだけが処刑された形となった。あたかも台風が荒れ狂って通過したように、通路にあたった人たちは自分の不運とあきらめ、その他の日本国民の大多数は、戦後インフレ——それから経済の高度成長——のなかで、戦争のことなど、あらかた忘れてしまった。忘れたところではない。戦争の原因あるいは遂行に重要な役割をはたした人間が政治の舞台に復帰し、強い発言力を行使している。こんな、歴史への無関心さ、責任への甘さは、敗戦国中、日本だけである。

そればかりでない。「平和に倦いた」若者たちに一種の刺激を与えようとするのか、勇壮活発な戦記ものや日本軍の兵器写真などが、さかんに出版されている始末である。見えざる手が「四次防」から「五次防」へと、兵器産業の利益のため、国全体を押し動かしつつあるとしか思えない。

日本人はそれでよいかもしれぬ。だが日本軍にいたためつけられた国々の人びとは、それではすまない。親しい人びとを虐殺されたうらみは、永久に消える

ものではないからだ。たしかに日本は、中国以外の諸国とは賠償協定を結び、実行した。だからといって、心の問題までが解決したわけではない。日本人が、賠償問題解決とともに戦争の罪は消えてしまったと考えるならば、たいへんなまちがいだ。それは日本の戦争犯罪人が出所後、郷里の選挙区から立候補し、当選したことをもって「罪が許された証拠だ」と言ったのと、同じ論理であり、同じ態度である。

日本経済の海外進出は、安くて品質がよければ売れるのは当然としても、日本の商人が人間としてのつつしみを忘れるならば、相手にどんな気持を与えるか。いったんは法律的に解決した戦中・戦後の問題が、あらたな意味をもってよみがえってくる。アジア諸地域で、戦後しばらくの間こそ住民の復讐をおそれて遠慮がちに振舞っていた日本人が、高度成長経済によって自信を回復し、横柄にふるまうようになったとき、「みにくい日本人」とか「黄色いヤンキー」という悪評が高まってきたのも、当然すぎるほど当然である。

しかも、一番の被害を与えた中国にたいしてはどうか。日本軍が悪事を働いたのは、中国の民衆にたいしてである。その中国の民衆と、蒋介石国府総統のひきいる軍隊との関係は、奪うものと奪われるものとの関係にあった。その国

府が内部腐敗と悪性インフレのため自壊し、代って中国共産党が政權を握ったのは、易姓革命の伝統をもつ中国としては、あたりまえのことである。にもかかわらず、その後もなお、日本は国府への「信義」と称して、中国民衆に与えた迷惑にたいしては過去の犯罪を反省する一語さえ、相手にはいまだに言っていない。ついでに言うておくが、日韓外交正常化のため椎名外相がソウルを訪問したとき、かれは空港の記者会見で、植民地支配の過去にふれて謝罪の意を表した。韓国の新聞はこの事実を大々的に報じた。韓国にたいして言ったことが、なぜ中国にたいしては言えないのか。

思うに、それは罪の意識からであろう。中国人がこわいのだ。「選挙民が自分たちを選んでくれたのだから……」といった三百代言的な理屈は、国外では通らない。いや、ほんらい国内でも通らないはずなのだが、そこをごまかしたのが「一億総懺悔」であった。

一億総懺悔とは、戦争責任の追及は勝利者である外国人にまかせて、日本人は相互に責任を追及しあわないということである。戦争責任をつきつめて考えないということは、日本国民は何となしに戦争をおっぱじめ、何とはなしに戦争を忘れてしまった、というにひとしい。責任ということについてのこの甘さ

が、一方では合理的思考の欠如となり、他方では逆の極端に走って情緒的なきびしさとなって直接行動を生み、結果として戦後議会民主制の空洞化をもたらしたのではないか。

戦争責任の問題は複雑であり、いろんな角度からの検討が必要である。だが、誰が見てもはっきりしており、かつ被害者の立場からみて最も直接的で忘れることができないのは、非戦闘員の虐殺である。本多君の中国ルポは、この最も簡単明瞭な虐殺事件——これまで日本人の手によっては明らかにされなかった——をさらけ出すことによって、日本人の良心による、せめてもの告発の第一歩にする、という意義をもつ。

このルポに対しわが国内の反響は区々であった。よくやったと讃めてくれたものもある。だが、おどろいたのは、よけいなことをしたという非難が、私の最初の想像以上に多かったことだ。

非難は大別して二種あると聞く。第一は戦争とはそういうものだ、いまさら日本の恥部ともいうべき日本軍の残虐行為をあばいて何になる？ 第二は、記述が一方的で、中国側のみの言いぶんを紹介している、日本側の言いぶんが紹介されていないのは、新聞の書き方として不公平ではないか？ というのであ

る。

第一点についての私の反論は、右述したところで既に十分だと思う。ただ一点つけ加えれば、このような立論をする人は、戦争否定論者よりも肯定論者や日本の軍備増加論者に多いように思われる、ということである。

第二の非難については、私はこれを理屈のための理屈だといいたい。たしかに、ふつうのニュースについて当事者の言いぶんが分れるときには、双方の言いぶんをのせるのが、新聞として公正なあつかいである。

だが、何十年も経過した事件について、——当時、中立国であった外国の諸新聞が、南京虐殺や漢口盲爆については大々的に報じ、知らないのは日本国民だけだった——今日、日本側から、そういう事件はなかった、でたらのめのでっちあげでなければ中国人一流の誇張だ、との証拠をあげることができるであろうか。もし可能だとしても、大筋についてではなく、小さい細目について、中国人の記憶ちがいを指摘しうる程度であろう。

日本軍は中国の非戦闘員をすいぶん可愛がってやった、というような主張はできるかもしれぬ。アメリカ軍の「ベトナム平和化」とか「ベトナム化政策」と呼ばれるもののなかにも、この種の発想法がふくまれている。だが「自国人

によるいかなる悪政も、外国人によるいかなる善政よりもましだ」ということを忘れてはならない。第二次大戦後、反植民地主義の波がたかまってきたのは、このためである。

ただ一つ私が聞いた批判のなかで、そういうこともあったらうと思われるのは、ある兵士の所属する部隊は軍紀がきわめて厳正で、掠奪・強姦・殺人などの軍紀違反があったときには、軍事法廷にかけられて処刑された、という話である。しかし被処刑者も公けには「戦死者」として報告されていたそうである。だが、この兵士の話によっても、軍紀が真に厳正であったのは「漢口作戦」までで、それ以後はみだれてきた、との印象を語っていた。

私自身、軍人ではないが「軍人に賜りたる勅諭」を陸軍補充兵としてはじめて読まれたとき、政治への不介入その他、ずいぶんいいことが書いてあると思った。同時に、軍部の高官は、もっともそれを実行していないではないか、と腹が立って仕方がなかったことを覚えている。その後、東条陸相だか首相だか忘れたが、かれのもとで出された「戦陣訓」なるものを一読したとき、明治の建軍の精神が変ってきたとの印象をうけた。「戦陣訓」の言葉はほとんど忘れてしまったが、偏狭な合理主義、さらにいうならば軍人の功利主義という印

象をうけた。「勅諭」から「戦陣訓」への変化が、モラルの退廃、虐殺事件の頻発と無関係でなかったように思う。

本多記者のルポは、大いにこれを問題としてほしい。太平洋戦中における虐殺事件については、全然これを知らなかった日本国民も少なくあるまい。新聞記者である私自身、はじめて聞かされた話も少なくない。だが、いかに不愉快であり、聞きたくない話であるにせよ、その段階を一度とおることなしには、日本人の良心というものは、なりたちえないのである。

われわれ日本人の多くはベトナム戦争におけるアメリカ軍の行動を非難し、また、沖縄基地における被支配と、そのもとでおこる数々の人権蹂躪に抗議してきた。だが、その前提として日本軍国主義のおかした多くを、はっきり見つめ、これを自責せねばならないのである。

一九七二年二月

（朝日新聞社論説顧問）

装幀 田村義也
図版 吉沢家久

目次 | 中国の旅

1	中国人の「軍国日本」像	11
2	旧「住友」の工場にて	37
3	矯正院	48
4	人間の細菌実験と生体解剖	59
5	撫順——侵略された側の歴史	86
6	平頂山事件	96
7	防疫惨殺事件	123
8	鞍山と旧「久保田鑄造」	140
9	万人坑	158

10	蘆溝橋の周辺	199
11	強制連行によるドレイ船の旅	212
12	上海の戦場	223
13	港	241
14	「討伐」と「爆撃」の実態	249
15	南京事件	255
16	三光政策	301
	跋	345
	〔索引〕	
	（巻末）	